

生活を総合的にとらえ目的に応じて生活をよりよくしようとす る力を育む家庭科授業の在り方

日 高 佳 菜 [鹿児島大学教育学部附属小学校]

Home economics classes aimed at developing student's universal life skills

HIDAKA Kana

キーワード：家庭科教育、家庭科授業、家族、家庭生活

1 研究の背景

知識基盤社会と言われる今日、子どもたちが生きていくこれからの社会には様々な課題がある。核家族化や世帯の小規模化、耐久消費財や外部サービスの普及、既製品購入の一般化など、子どもたちを取り巻く社会は、より便利に、より速くすることに向かって歩んでいる。一方で、情報や物が氾濫しており、その中でよりよく生きていくためには、それらの情報等に流されることなく、自己や家族が自分や自分たちらしく生きるために有用なものやことをあらゆる視点から取捨選択して利用していく力がなければならない。そして、具体的な生活場面の中で、知識や技術を駆使して総合的に判断し、実行する力が必要である。さらに、相手や状況に応じて手段を工夫しながら、自分の思いや願いを能動的に追求していこうとする力が必要である。また、近年は、地域の家庭生活文化の継承、国際化、情報化、福祉問題など、子どもたちを取り巻く生活環境には様々な教育課題が内在しており、家庭生活を総合的に捉えられる子どもを育成していかなければならない。さらに、家庭生活は人、もの、環境、情報などとの関わり合いによる総合的な営みであり、衣・食・住、保育、家族関係、消費、環境など様々な内容に関する知識や技術などを有機的に関連付け、様々な立場の他者とともに総合的かつ能動的に生活していける子どもを育成する必要がある。

戦後の家庭科教育において一貫して目標として掲げられてきたのは、家庭生活の『基礎基本の知識・技術の習得』、『家庭生活の意義の理解』、『家庭生活に必要な能力と（主体的、実践的）態度の育成』の3点である。家庭生活をつつがなく維持

運営するための能力を磨くことが求められており、家庭生活から出発して、生活にかかわる問題を広く考えたり、問題解決に知識、技術を活かしたりといった、学習目標や内容をより広くとらえる方向性は弱いといえるものであった。しかし、時代の流れやこれからの社会に求められる力などから、主体的に生活を営む力を培うというところに教科の価値が見出されてきた。日本家庭科教育学会新構想研究委員が提示した「家庭科教育が育む『生きる力』概念図」では、家庭科教育で最終的に多文化共生社会をめざす中で、個人・家族の生活を展望し、家庭生活や市民生活を創るために必要な資質・能力を育むことを目標としている。ここでいう「家庭生活、市民生活を創る資質・能力」は、より具体的には、「生活を総合的に認識できる力」「必要な情報を選び取り批判的に見つめる力」「人、社会、自然とのつながりを認識する力」のことである。これらをもとに「生活者として生活をどう営むかの生活観を確立し、社会参加への展望を切り開く」ことが期待されている。このように、家庭科教育では、家庭生活内での判断力・実践力だけでなく、生活観の確立や社会とのつながりを認識する力を育てることが必要であると考え、以下の授業創造の基本的な考え方を明らかにした。

(1) 家庭科授業で目指す子どもの姿

家庭科で目指す子どもの姿を、○柔軟に計画を立てたり選択・判断したりすることができる子ども、○限られた生活資源や様々な環境や状況の中で、目的に応じてよりよい生活を追求していこうとする子ども、○友達と教え合ったり、役割分担を意識したりしながら具体的に問題を解決してい

く子どもと設定した。○限られた生活資源や様々な環境や状況の中で、目的に応じてよりよい生活を追求していこうとする子どもとは、自分の生活と関連のある物的環境や人的環境とのつながりに気付き、それら複数の視点から生活をとらえることができる子どもである。さらに、自分の目的によって重視する条件を考え、自ら生活をよりよくしようとするすることができる子どもである。○柔軟に計画を立てたり選択・判断したりすることができる子どもとは、時間や材料、作業の順序、役割分担など、自分の目的を達成するために活用し得る条件を組み合わせることで効率的に近づくための計画を立てたり選択・判断をしたりすることができる子どもである。○具体的に問題を解決し自分の生活を変えていける子どもとは、生活における問題点や矛盾点を目を向け、学習したことを生かして自分や身の回りの生活をよりよくするための解決方法を見出したり、具体的に働きかけたりすることができる子どもである。これらに共通しているのは、生活を総合的にとらえ、目的に応じて自ら生活をよりよくすることができる力が必要であるということである。子どもたちは、家庭科学習においてだけでなく、最終的に自分の生活に応じて自ら行うことができるようになることで、家庭科で育成したい姿に近づいていくと考えた。

(2) 7つの力や態度を発揮させる授業創造

目指す子どもの姿に近づくために発揮させるべき力や態度を「7つの力と態度」を設定し、図1のように学習過程において位置付け、題材内で効果的に発揮できるように設定した。

このように、学力の三要素を高めるためには、題材全体を通した目的・目標・問題に基づいて、子どもたちがストーリーを考えながら学習計画を立てていかなければならない。導入段階では、多面的・総合的視点から考えることにより高まった目的・問題意識を基に、最終的に進んで参加するための力を身に付けたいという目標をもって学習を展開する。学習を展開する中で、目的を達成するために必要な計画を考えたり吟味したりする。また、自分や自分たちに不足している情報を得たり練習したりしながら終末段階での実行・実践へ

順序	想定できる学習活動	7つの力や態度との関係 (吹き出し内は、活動設定例)
1	目的・目標・問題の設定	多面総合参加 未来予測 【多面総合】 社会問題や自然環境などと学習内容との関連性を考える活動
2	学習計画立案	未来予測 コミュニケーション 【未来予測】 設定された時間でどのように課題を解決していくか計画(段取り)を考える活動
3	情報の収集・分析・練習	つながり
4	実行計画立案	未来予測
5	試しの実行	協力
6	試しの実行を評価	目的整合
7	情報の収集・分析・練習	多面総合 つながり 【目的整合】 環境、時間、動線、役割分担など様々な視点から、当初立てた計画(段取り)を見直す活動
8	実行計画修正	未来予測
9	実行	協力
10	実行を評価	目的整合
11	問題の自覚化	つながり 参加 【参加】 この学習を通して自分たちがどのように家庭や社会に働きかけることができるか考える活動

【図1】 7つの力や態度の学習過程における主な位置づけ

向けて必要な力を身に付けていく。

2 研究の方向

今回は、これまでの授業創造の考え方を踏襲し、一人一人が考える過程をさらに重視した学びの展開を目指し、考える過程で発揮される学び合いでの思考力・判断力・表現力を確かに身に付けさせる必要があると考えた。つまり、集団での学びが、目的や目標に応じた有効な情報のやり取り、一人一人が生活に生かすための必要な力を深める場とならなくてはならない。また、家庭科学習では、家庭生活に関する身の回りの様々な対象(人、もの、こと)とのかかわりの中から様々な問いや思いが生まれる。このことから、生活と密着した学習を展開し、集団の学びの中で、生活とつながりのある学び合いがなされる必要であると考えた。友達との学び合いを通して互いの学びを見つめ直し、修正しながら展開していく姿が「学び合う姿」であると考えた。また、今もっている知識や技能を駆使して、自分の力で主体的によりよく課題を解決していく力としての「思考力・判断力・表現力」の育成が大切であると考えた。

3 生活を総合的にとらえ目的に応じて生活をよりよくしようとする力を育む家庭科授業の基本的な考え方

- (1) 生活を総合的にとらえ、目的に応じて自ら生活をよりよくすることのできる力を育む家庭科授業とは
子どもが、どのように自分の生活を変化・創造

していけばいいのかを具体化していける授業である。また、生活とつながる学び合いが保障されている授業である。

(2) 学び合う授業とは

思考力・判断力・表現力にかかわる「多面総合」「目的整合」「未来予測」「コミュニケーション」を発揮し、基礎的・基本的な内容を学ぶ授業である。このように「多面総合」「目的整合」「未来予測」「コミュニケーション」をよりよく発揮させるためには、たとえ新しい問題場面に出合ったとしても、それまでに活用したことがある「多面総合」「目的整合」「未来予測」「コミュニケーション」や既習の内容を思い起こしながら、それを生かして学びを展開していく「集団の学び」が「個に返る」授業づくりが大切になると考える。

(3) 「集団の学び」が「個に返る」とは

「集団の学び」とは、見出した課題を解決するために、学級や課題別グループで互いに役割を果たしながら情報を収集・交換し、共通課題における問題解決的な学習での追求活動から、家庭生活に生かす土台となる力を高められる学びのことである。また、「個に返す」とは、集団の学びの中で実感した、家庭生活の営みのよさや根拠となる事象を、自分の家庭生活に置き換えて考えたり、実践したりできることである。

4 学習指導の具体化

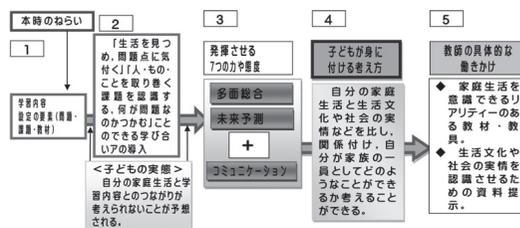
生活とつながる学び合いを「多面総合」「目的整合」「未来予測」「コミュニケーション」と内容の2つの視点から、○目的を明確にするための学び合い、○自分なりの課題を明らかにすることができる学び合い、○工夫のよさを高め合うことができる学び合いと設定した。○目的を明確にするための学び合いとは、自分たちの学び合いによって、家族や身の回りの人たちにとってどのように生活をよりよくすることができて、何を解決・達成していかなければならないか明確にすることである。○自分なりの課題を明らかにすることができる学び合いとは、自分の生活課題の解決に向けて、思考力・判断力・表現力を駆使しながら、一人一人が確かに自分なりの現在の課題を認知することである。○工夫のよさを高め合うことができる学び合いとは、自分の見出した工夫と友達の見

出した工夫とを吟味し合っていく中で、互いの考えを整理したり、より高次な考えを生み出したりすることである。

このような学び合いの姿を展開させるためには、学習指導の工夫として、「目標設定における学習指導の工夫」、「思考の仕方における学習指導の工夫」が有効であると考えられる。

(1) 目標設定における学習指導の工夫

家庭科を学習する小学校高学年以上の子どもでは、自分の家庭生活や生き方と関連するような目標をもって学習活動に励むことのほうが多い。ただ単に、学習活動それだけが目標というような状況は少ない。子どもたちは、自分のもっている能力や可能性を最大限に発揮し家族の一員、社会の一員といった独自の人間に成長することを、よりよい目標と考える。こういった考え方に立つと、わたしたちは自分らしい目標をもって学習することが重要である。その目標が自ら好んで自己決定したこと、すなわち広い意味での自発性がそこに認められるならば、内発的といえる。このような点でも自発性の観点が重要であるといえる。ここでいう社会とは、小学校での家庭科においては、家庭生活の意味合いが大きい。そこで、図2のように目標設定を自分の家庭生活や社会に関連させて「多面総合」「未来予測」「コミュニケーション」を発揮させることで、集団の学びをより効果的に生み出すことができる。



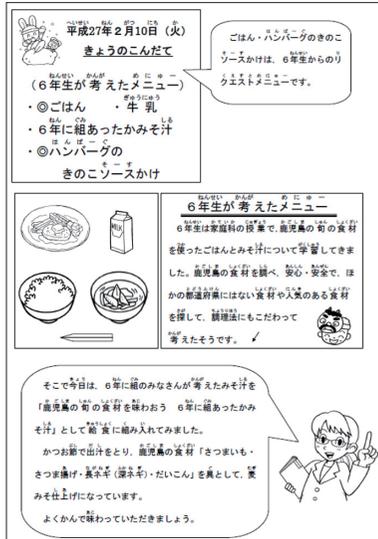
【図2 生活と結び付けた目標設定の手順の考え方】

◇ 目標設定における学習指導の工夫の具体化

- ・ 対象の広がり、対象に対しての課題意識もたせる手立て～イメージマップと共通課題(試しの調理)～

子どもが自分の食生活上の課題に気づき、学習した知識や技能を生活に活用していくには、子ども一人一人に必要感をもたせ、家族のためにでき

できる。また、これまでの学習を生かし、家庭での実践につなぐ手立てとして、図8のように学校給食の献立として提案するなど指導計画の改善を行った。



【図8 提案したみそ汁の献立】

「一食分の食事」の学習では、これまでの食生活の学習をより総合的に考え献立を立てることから、試しの調理として、表1のように共通課題を教師が設定し、家族を想定して献立作りを行うことができる。このことは、より主体的に自分の家庭や家族といった相手意識や目的意識を常に持ち続けさせ、家庭での実践へ向かうために有効であると考えられる。

例	「わたしの家族の〇〇は、△△だから、□□な朝食」
A	母は忙しく働いていて、自分の時間があまりない。その上、最近疲れやすくなり風邪をひきやすい。だから、母がよりきれいになって、疲れを吹き飛ばす朝食
B	70歳の祖父は家にいることが多く、運動不足である。また、和食好みで肉の加工食品やチーズ、インスタントなどは、食べられない。だから、体をじょうぶにして、食材のよさを十分にいかした和食の朝食
C	高1の兄は陸上部の朝練が大変そう。だから、朝から元気いっぱい走るパワーをつける朝食
D	小1の妹は朝の準備に時間がかり、朝食をあまり食べない。野菜が苦手。だから、手軽でおいしく野菜が食べられる朝食

【表1 相手を意識した共通課題】

5 学習指導の実践

生活を総合的にとらえ、目的に応じて自ら生活をよりよくすることのできる力を育む家庭科授業の実践について第6学年「わたしも調理名人Ⅲ～ご飯とみそ汁」をもとに述べていく。

(1) 題材の特性及びこれまでの課題

この題材を、6年生に設定してある。それは、5年生からの食生活の関連学習の流れを考えて設定したものである。5年生では、ゆ

でる、炒めるという調理法を使ってのおかず作りに挑戦する。ゆでる、いためるでは、1品料理となる。そして、本題材では、ご飯とみそ汁という2品料理になる。この学習後、献立の立て方を学び、1食分の食事を整える学習へと発展していく。

これまでの試しの調理を基に追求課題を立て、情報収集、情報交換を行っていたが、獲得した情報を学級での本番の調理実習に活用することが中心になってしまい、自分の家庭生活に置き換えにくいという実践上の課題があった。実践的な態度へとつながられるためにも、自分の家庭生活や食べる相手を意識し、実践したいという思いを高める工夫が必要である。

(2) 課題解決のための手立て

- ・ 常に家庭生活に置き換えて考え、家族に対する思いが継続できるようにするために、「わたしの家族は、〇〇だから、□□なみそ汁」を作りたいという個人の追求課題を設定する。
- ・ 個人の追求課題を達成するために、どのような方法でどのような情報が必要なのかを明らかにし、最終目標を意識できるようにするために、仮説を立てて活動の見通しをもたせる。
- ・ よりよいみそ汁を作るための視点をより多くもたせるために、栄養教諭と連携を図り、学校給食を教材として活用し、必要な情報を提供してもらう。
- ・ 追求活動や情報交換で得た情報を吟味したり、活用したりして、他者を意識した調理計画が立てられるようにするために、家庭での実践の前に学校給食に提案するみそ汁を考えさせる。

① 題材の目標

【関心・意欲・態度】 ご飯とみそ汁に関心を持ち、食品の組み合わせや食品の選び方、材料の分量などを考えながら、ご飯とみそ汁を作ろうとすることができる。

【生活を工夫する力】 米やみその特性のもと、食品の種類や特性、食べる人の目的に応じた調理

計画を立てることができる。

【知識・理解、技能】米やみその栄養的な特徴が分かり、食品の特性を考えながらご飯とみそ汁を作ることができる。

② 指導計画

- 1 ご飯とみそ汁のよさについて知り、自分が家族に作りたいご飯とみそ汁の目標を設定する。
- ①
- 2 ご飯とみそ汁の試しの調理をし、その成果や課題から、自分が家族に作りたいご飯とみそ汁の目標を達成するための仮説を設定する。②③
- 3 自分の目標を基に、課題別グループで追求活動を行う。④⑤
- 4 課題別グループで追求したことをまとめる。

⑥

- 5 課題別グループで解決した結果を情報交換し合い、得た情報をもとに、自分のご飯とみそ汁を見直す。⑦（本時：図9）
- 6 これまでの学習を振り返り、学校給食に提案する学級のご飯とみそ汁のテーマを設定し、調理計画を立てる。⑧
- 7 調理計画にそって調理をし、学習したことが自分の生活にどのように生かしているか話し合う。⑨⑩

③ 本時の目標

課題別グループで追求したことを基に、よりよいみそ汁を作るには、どうすればよいか進んで情報交換することができる。また、栄養面だけでな

過程	主な学習活動	時間	教師の具体的な働きかけ
みつめる・つかむ・見通す	1 学習課題を設定する。 よりよいみそ汁を作るためには、どのようなことを考える必要があるのだろうか。	(分) ↑ 5 ↓	○ 常に家庭生活に置き換えて考え、家族に対する思いが継続できるようにするために、「わたしの家族は、○○だから、□□なみそ汁」を作りたいという個人の追求課題を振り返らせる。 ○ 情報交換の必要性が感じられるようにするために、家族に作りたいみそ汁のテーマとよりよいみそ汁にするために現段階での考えられる視点を比較させる。 ○ 追求している課題がよりよいみそ汁を作る上で重要な視点であることを実感させるために、栄養教諭や担任によって作られたみそ汁を提示し、各家庭のみそ汁は、よりよいみそ汁を作るために追求していた視点が総合的に取り入れられていることを実感させる。また、「自分もみそ汁を作ってみよう」という思いを高め、家庭に置き換えて考えさせる。
	2 個人の追求課題について振り返り、これまで追求活動がよりよいみそ汁作りに関係していることを確認する。 個人の追求課題 わたしの家族は、○○だから□□なみそ汁 (例) わたしの家族は、夏は、暑くて夏バテ気味になるので、元気になるみそ汁を作りたい。 わたしの家族は、朝早く出かけるので、短時間で栄養がとれるみそ汁を作りたい。 追求課題 ←→ 追求活動 栄養 みそ だし 実 調理法	12	
追求する	3 他のグループと情報を交換し合い、自分のみそ汁で生かせることを明らかにする。 <栄養> ・ 不足している栄養を補う。 ・ 栄養バランスを整える。 ・ 五大栄養素 食材 <みそ> ・ 麦・米 ・ 豆など <だし> ・ 煮干し ・ 昆布・鰹節 ・ あご など <実> ・ 旬 ・ 地産地消 調理法 ・ 切り方 ・ 手順 ・ 分量 など	↑ 23 ↓	○ 思考の過程を可視化できるようにするために、「自分の考え」「他者の考えによる気づき」「根拠」をワークシートに記録させる。 ○ 得られた情報が、みそ汁を作る際に具体的に生かされるために、みそ汁をつくる相手である家族にとってどのような視点が有効であるのかを考えさせ、得られた情報と自分のみそ汁の追求課題との関係性を問う。 ○ 確かな知識・技能の定着を図るために、情報交換の場での説明や理解が十分でない場合は、教師が補足説明や指導を行う。 ○ 情報交換から見出した「栄養」「食材」「調理法」とみそ汁の調理計画とを関係付けて調理できるようにするために、食材の実物や実験に用いた物を触れたり、観察したりしながら、調理計画を立てさせる。 ○ 学び合いの価値を実感できるようにするために、本時で納得した場面やうれしかった場面やその理由などを問い、賞賛する。
まとめる・生活化への意欲付け	4 調理計画の見直しを行う。 自分のみそ汁の調理計画 わたしのみそ汁は、栄養価の高い夏が旬の食材を実にしよう。だしは、煮干しにして食べよう。 4 学習のまとめをする。 目的に応じて、食材を組み合わせたり、調理法を選んだりする必要がある。 5 本時の学習を振り返る。	↑ 5 ↓	

【図9 本時の実際】

く、相手を意識した食材選びや調理法などの工夫を自分のみそ汁の調理計画に生かすことができる。

④ 7つの力や態度の発揮

よりよく調理するためには、どのような工夫ができるのか、「食材の選び方」や「調理方法」などの視点から自分の班と他の班の追求を比較し、自分の家庭での調理での実践に必要な情報を多面・総合の力を発揮させることで提供、獲得させる。

自分の調理のどこに生かすことができるか、情報交換で見出した工夫のよさと自分の調理を関係付けながら目的整合の力を発揮させて考えさせる。

⑤ 本時の展開にあたって

本時では、思考の高まりを目的にした学び合いが重要であると考え。そこで、自分の作りたいテーマに合ったみそ汁を達成するために、選んだ食材や調理法の関係性を問うことで、「旬の野菜は、安く、新鮮で栄養価が高いのだな。その野菜を実として、栄養いっぱい健康みそ汁を作りたいな。」などの考えを引き出しながら展開していく。

⑥ 結果と考察

- 自分の家族に作りたいみそ汁のテーマとよりよいみそ汁にするために現段階で自分もっている視点を比較させることで、常に家庭生活に置き換えて考え、家族に対する思いが継続していた。
- よりよいみそ汁を作るためには、作る相手に応じて食材や調理法など総合的な視点をもたせるために、栄養教諭や担任、家庭科専科のみそ汁の工夫を提示することで、「自分もやってみよう」という思いを高め、家庭に置き換えて考えることができた。
- よりよいみそ汁の視点を提示をすることで自分がこれまで追求してきた視点と情報交換によって得られた視点とを関係付けることができた。

6 研究の成果と課題

(1) 成果

- 「家族のためにできるようにしたい」「やっ

てみたい」と家庭での実践を常に意識しながら、必要感をもって学習に意欲的に取り組む姿が見られた。

- 自分の目標と追求方法とが関係しているのかを考え、自分の仮説を更新しながら、追求活動を進めていた。
- 思考を働かせる条件（比較・関係付け）での視点がより明確になり、共通認識の中で生活を工夫する力（思考力・判断力・表現力）を高める姿が見られた。

(2) 課題

- 生活をより総合的にとらえるための学習指導をさらに具体化していく必要がある。
- 教師と保護者からの継続的な見届けや価値付けの充実を図る必要がある。

付記

本報告は、鹿児島大学教育学部附属小学校平成25～27年度研究紀要で発表した研究内容等に基づき、家庭科教育において研究をさらに発展させ、その研究成果をまとめたものである。

【主な参考文献】

- 荒井紀子「生活主体を育む」（ドメス出版 平成21年）
- 荒井紀子「パワーアップ！家庭科」（大修館書店 平成24年）
- 吉原崇恵「子どもがいきる家庭科」（開隆堂 平成22年）
- 日本家庭科教育学会「家庭科から広がる食の学び」（ドメス出版 平成17年）
- 子どもの生活を真ん中においた総合学習 家庭科からのアプローチ（芽ばえ社 平成15年）
- 文部科学省「小学校学習指導要領解説編 家庭編」（東洋館出版 平成20年）
- 文部科学省「小学校学習指導要領解説編 総則編」（東洋館出版 平成20年）